

## アスコーフ民衆高等学校への訪問

オットー・サロモン 著  
横山悦生 訳

それは、ある午後のことでした。アスコーフ民衆高等学校に属するスウェーデン（体操）のシステムに従って組織された大きな体育館は、講演を聞こうとしている聴衆でかなり一杯でした。それは少し奇妙な音楽会の観客でした。というのは、観客に混じって派手な服装の女性たちやしっかりと双眼鏡をにぎった冷淡な男性たちを探すのはできませんでした。そこに来たすべての人は、時間を潰すためではなく、午後のプログラムで提供されることを批判的に議論するためでもありませんでした。さらにプログラムという表現を文字通りに理解してもいけなかった。というのは、聴衆のために印刷されたり書かれたものはなく、それに代わって指導者がこれから始めますといいました。

しかし、このような田舎で行われる公演はなにをみせてくれるのでしょうか？また、誰が出演するのでしょうか？後者の質問への答えは、多くの場合公演の主催者は民衆高等学校の生徒であり、その地域に住んでいる農民の場合もあります。状況を知らない多くの人にとってとても奇妙に聞こえるかもしれませんが、一台のピアノを二人で弾くシャルル・グノー（Charles Gounod）のファウスト（Faust）が最初の出演曲であり、最後の曲はモーツァルトの弦楽器四重奏です。それは、実際には正真正銘の「農民の演奏家たち」で、その人たちは最後の曲や多くの同様の曲を弾き、私の判断では十分に芸術家的な弾き方でした。というのは、彼らは近くの一つの教区において何世代にもわたって農民のいろいろな家族の中で練習し、それによって本当の名人の域に達したからです。この伝統、この先祖からの遺産をその次の世代が気持ちのよい義務として守り、さらに発展させるべきであると感じています。当然これは何かより地方的な特徴であり、しかし恐らくその地方的な特徴との関係において、デンマークの農民階級のなかに何か貴族的なもの、また最高で本来の意味における教養が存在することも示唆されます。一人一人の観察者の目にすぐに入ってくるところのこの状況は、とても奇妙なことにデンマークの農民は他の北欧の国の農民の状況と違って、何世紀にもわたってスターヴンスバーンデット（Stavnsbaandet）という奴隷制度によって厳しく抑圧されてきました。

この憎むべき、人間の価値を引き下げる関係を廃止してからわずか百年余りであり、新しき生まれた力を不思議に思い、同時に尊敬するに違いありません。その結果はとても明白です。とりわけ、以下のことが示されてきました。デンマークで起こった最近の数十年間の農業分野での変化がどのように続いてきたか、それは主に穀物を生産してきた国から酪農に身を投じ、家畜を飼育する国に変わってきました。もしデンマークの農民自身が教育を受け入れられる人たちでなく、実際に精神を鍛えなかったら、落ち着いた方法でそれを進めることはできず、大きな経済的な混乱を起こしたにちがいません。この点で、グルンドウィの創造であるデンマークの民衆高等学校が、デンマークの民衆の精神的及び物質的な生活の中心に深く影響を与えるという使命をもってきたことはほとんど疑問の余地はありません。

アスコーフの民衆高等学校は昨年創立 25 周年を祝うことができました。というのは、1865 年に壮大で有意義な活動が始まったからです。しかしながら、もし学校の定義が一定の場所に建てられた建物ということではなく、一人の教師あるいは複数の教師が学校と呼べるならば、アスコーフ民衆高等学校はもっと以前から存在していました。ハーデルスレーブ（Haderslev）の町の北 30 キロメートルに、ロディング（Rødding）民衆高等学校があり、それが歴史上最初の民衆高等学校で、1844 年に創立されました。1864 年 5 月、継続中の戦争の間にその生徒たちが自分の家に急いで帰ったので、この学校は活動の中断を余儀なくされました。数ヶ月後に休戦になり、秋には平和になりました。それにより、国境がロディングの北 10 キロメートルに引かれました。いくつかの理由によって、デンマークの民衆高等学校をドイツ政権下の土地に維持するのは適切ではないと考え、ロディングの民衆高等学校に勤めていた教師であるルードヴィッヒ・シュレーダー（Ludvig Shrøder）、ハインリッヒ・ヌッツホルン（Heinrich Nutzhorn）、フェンガー（R. Fenger）の三人が、学校を国境の北に移すことを決定をしました。募金が集められ、彼らは新たな国境ソンドリルランド（Sønderylland, Nordslesvig 北スレスビヒ）から 4 キロメートル離れたところにアスコーフ村があり、そこは南に下るとコンゲーアンがある丘の上であり、その村に農民の小さな屋敷を借りました。その後、その屋敷に属する農地が購入され、年を経るごとに学校にとってもその教師たちにとっても新しく、その目的にふさわしい建物が建てられ、現在は小さくて地味な農民の屋敷がそれ自体

が一つの社会に変わりました。デンマークにとってだけでなく、北欧全体にとってある意味で教育センターに変わりました。この活動を作り出すために、巨大で粘り強い活動や多くの闘争が必要とされ、多くの困難、特に経済的な種類の困難がありました。それを為しとげた、高貴で自己犠牲を厭わない紳士たちと淑女たちに敬意を込めた挨拶を送ります。彼らの行為は確かにこれからの世代に足跡を残すでしょう。

アスコーフにあるような学習施設を描写するのはとても難しく、ある点では全く不可能です。その活動がどんな計画を持っていたか、どんな教科があったか、講義時間をどのように配分していたか、等々の表面的な種類のことすらそれを調べてもほとんどわかりません。私自身もこの民衆高等学校が優れていることについて読んだり聞いたりしてきたのですが、しかしそれについての私のイメージが実際のものとはまったく違っていたことがすぐ明確になりました。このような学習施設を特徴づけるところの生活そのものは読書だけではわかりません。また、目に見えるような文章によっても理解できるものではありません。生活は生活してみなければわかりません。たとえ数日間でもそこで生活する機会があれば、当初ほとんど知らないことがかなり明瞭になります。少なくとも私にはそうでした。私以前の訪問者の多くの人も同じようなことだったでしょう。したがって私はアスコーフについて描写することはできません。しかし、私はもっとよいことができます。すなわちアスコーフへ旅行することが可能なすべての人に対して、それを推薦することができます。その旅行は決して後悔することはないでしょう。

1879年以降、アスコーフは「拡大された」民衆高等学校になり、それはその種類において最初のもので唯一のものであります。拡大されたことによって、その教育は他の民衆高等学校より広い範囲の教育が行われており、それゆえそれだけ生徒が受ける教育の可能性が大きくなったにちがひありません。また、以前に他の民衆高等学校に通っていた生徒の多くは、高等学校卒業試験や教員試験に合格してきました。状況がそうでなければならぬことは、いくつかの講義に出席した人は気付いている。というのは、アスコーフがもっている優れた教師力をもってしても、普通の民衆学校の教育を受けただけの生徒ではアスコーフで行われている授業を理解することは不可能であり、学校の男子生徒も女子生徒もその大多数は実際に授業を理解できないことを私は確信しているからです。私は多くの講義を聴く機会を得ました。学校長シュローデル氏の「グルンドヴィッヒのイギリスへの旅」、ヌッツホルン氏の「天の山 (Himmelbjerget)」、ポール・ラ・クール氏の「ニュートンについて」講義を聞きました。シュローデル氏は有名な歴史家であり、ヌッツホルン氏は歴史研究者であり、作曲家でもあり、ラ・クール氏は天才的な発明家で、数学史と物理学史の有名な解説者で、この三人の教師はその学校の教師集団の中心的な存在です。その三名の教師に加えて、ジェニー・ラ・クール(Jenny la Cour)や、ベグトループ(Begtrup)、アッペル(Appel)など、十数人の男女の教師たちが同等に教師集団にいるが、残念ながら私は彼らの講義を聴く機会がありませんでした。しかし、その講義はそれぞれとても優れたものだそうです。

私は自分が聞いた彼らの講義について、その全体としても詳細においても自分の内的感覚にとって明白であるので、それを描きたいのです。私は心地よい教室が徐々に百人くらいの若い男女で満たされていくのを見ました。彼らは、簡素であるがきちんとした服装で、非の打ちどころのない振る舞いをしていました。ひとりの教師が入ってきて、集まってきた人たちに上役としての挨拶ではなく、友人としての挨拶をしているのを見ました。彼は歌の本 (sangbok) をめくり、番号を読み上げ、デンマークの民衆高等学校が持っている豊かな歌の中から、空想と感情に訴える祖国デンマークの歌の一つをとりあげました。デンマークでは、スウェーデンと比べると音楽的に上手に歌わないかも知れませんが、私たちスウェーデン人よりもより楽しみながら歌っています。このことは、多くのデンマーク国民にとっては少なくとも重要なことであるように私には思えます。その後で講義が始まりました。率直に言って、私はまったく違ったことを考えていました。私が期待していたのは、海峡の向こう側にある私たちの兄弟国のデンマークでは当然の、言葉の豊かで話し上手なスピーチでした。それに代わって、その講義は形式の点でも内容の点でも落ち着きがあり、節度ある立派さをもったものでした。それは教壇での講義というよりも、むしろ会話という印象でした。それは、それを聴く意志と能力をもつ男性や女性に対する話でした。そこに居る人たちは、自然な話し方という優れた技能を明らかに身につけていました。その技能はすべての人には最も難しい技能かもしれません。それゆえ、そのような技能をもつ人は少ないのです。講義のなかで話されたことはいずれ忘れるでしょうが、どのような表現で話されたかは、私の記憶に今後ずっと刻みこまれるでしょう。多くの講義する人はアスコーフの学校に行くのがいいと私は自信をもって主張したいのです。

その他にも、このデンマークの一番高貴な民衆高等学校では話す技能だけでなく、聴くという技能がと

でも重視されていたことがとても注目されることでした。私の滞在した日々のある日に公的な会議がありましたが、それは民衆高等学校の活動に含まれていました。そこにはスウェーデンの教育的スロイドについての講義と討論、スウェーデンとスウェーデン体操とスウェーデンの織物についての講義や討論があり、それらはアスコーフのコースで高く評価されています。ここには周囲（地域）からの人々が特に集まっています。また、数人の学校関係者、主に農民がたくさん集まり、その中にはドイツとの国境線を越えてやってきた、品位のある、強靱な力を持った勇敢な農民たちがいて、戦争には敗北したけれども屈伏することはない農民たちが集まりました。体育館の中では、演壇の後ろにスウェーデンの国旗で美しく飾られていました。いくつかの歌が歌われました。そのあとスロイドについて約4時間話がなされました。これは特に特異なことではありません。なぜならこのことは誰でもできることです。しかし、そのような（長い）時間注意深く聴くことは、アスコーフのような民衆高等学校に通っている人だけができることです。

さらに付け加えなければならないことが、たくさんあります。しかし、私は紙面に余裕がないことを恐れています。私はアスコーフでの家庭生活について、美味しくて経済的な食事の習慣について話したいと思います。60人ほどの男子学生たちとともにテーブルに座り、校長先生の家族と一緒に食事すると、それは心地よい印象を与えます。そこには夫の忠実で知的な助手のシャルロッテ・シュローデル夫人が、家政婦でなく、主婦としてそこにいます。私は学生たちがそこで何を学んでいるかを語りたいのですが、まず第一にそこで学生たちが何を感じているのかを語りたいのです。最後に、私がスウェーデンへの帰りの旅でたまたま知り合った、以前にその学校の学生であった人が話した興味深いことを報告したい。その教育施設を評価できるのは、一時的な訪問者ではなく、そこで学んでいる学生だけです。しかし、先に述べたように私はここで書くのを終えなければなりません。私は、昼にアスコーフを去り、夜にコペンハーゲンに到着しました。その時、娯楽を求める首都の住民が劇場を去り、王様の村（Kongens By）で現在流行していると思われるショーに向かって多くの人が行きました。アスコーフからコペンハーゲンに行ったときの（デンマークの）印象の変化は大きかったです。しかし私はオステル通り（Østergade）を歩くのとは別のデンマークを個人的に知ったことは嬉しかったです。

(1891年)